

## 軍務に精勤した学徒兵たちのライフストーリー研究

渡辺 祐介<sup>i</sup>

今日、学徒兵は反戦的な「わだつみ」イメージで語られるが、彼らの多くはサボタージュすることなく軍務に精勤した。従来の学徒兵研究は、彼らの〈精勤ぶり〉について、主に学徒兵の思想や世代の特性によって説明してきた。しかし、軍隊生活での彼らの〈生き方〉にまで目を向けなくては、彼らの〈精勤ぶり〉を十分に理解することはできない。そして、軍隊生活で培われた〈生き方〉は、生還した学徒兵の戦後の人生を理解する上でも重要である。そこで、本研究では三人の元学徒兵のライフストーリーを基に、軍務に精勤した彼らの〈生き方〉を明らかにした。その結果、学徒兵が軍務に精勤した「謎」を解く五つのキーポイントが挙げられる。第1は、過酷な軍隊生活で‘よりましな居場所’を得るには、軍務に励み上官から認められる必要があったこと。第2は、身近な他者への〈責任感〉や〈連帯感〉が精勤を支えたこと。第3は、軍隊生活の「楽しい」出来事が軍務の厳しさを一時的に緩和させ、軍務に再び精勤できる糧になったこと。第4に、「自由」が制限される軍隊で、なげなしの「自由」を追求する態度が軍務への精勤を支えたこと。第5に、軍隊生活の日常化（習慣化）に伴って軍務に精勤することを自明視するようになったこと、である。戦時でも平時でも、青年は自分なりの〈生き方〉で精一杯生きねばならず、そうした〈生き方〉は軍国主義などのイデオロギーと共に綺麗に清算できるものではない。戦後も否定できない彼らの若き日の〈生き方〉こそ、戦争を支えた一人一人の‘下からの力’ではないだろうか。

キーワード：学徒兵 戦争体験 軍隊生活 精勤 ライフストーリー

### はじめに

戦後70年の節目が過ぎた2015年9月、多くの国民の理解を得られぬままに安全保障関連法が成立し、日本の安全保障政策上の大きな転換点となった。同法に反対する運動が広がりを見せたなかで、筆者が思い出したのは『戦艦大和ノ最期』の著者として知られる元学徒兵吉田満の「一兵士の責任」という論考の一節である。

「召集令状をつきつけられる局面までくれば、すでに尋常の対抗手段はない、そこへくるまでに、お

そくとも戦争への準備過程においてこれを阻止するのでもなければ、組織的な抵抗は不可能となる。目に見えない“戦争への傾斜”の大勢をどうして防ぐかにすべてがかかっている。——このような血のにじむ結論を踏みこえてその上に実を結ばせてくれることこそが、われわれの何よりの念願だったといえるのだ」（吉田 1980: 162）。

吉田は自身の戦争体験の記録をまとめたことで「戦争協力行為の核心のようなものを発見した」（同 155）。それは、①戦争一般、特に今度の戦争の意味について強い疑念をもっていたにもかかわらず、国民の最低限の義務として徴兵を拒否せず、戦争を絶対的に否定する道をとらなかったこと、②軍隊生活で意識的にサボろうとする態度をとらず、普通の

i 立命館大学大学院社会学研究科研究生

人間の当然な誠意だけは持ちつづけたこと、③戦争というものの本当の悲惨さの実感、④死に直面した時のほげしい無念さ、生き残った同胞が今度こそは本当の生き方を見出してほしいと祈りたいような、声の限り叫びたいような気持であったという(同156-7)。そして上記のような「結論」へと至ったわけであるが、ここで重要なのは①と②の点である。というのも、吉田の警鐘は主に①と②の事実に基づいていると思われるからである。

末川博が新版『きけわだつみのこえ』のはしがきで「わけても、若いあなたには、あなたの先輩が何をしたか、どんなことを考えていたか、そして死を前にしてどんなに苦しみ悩んだかを知っておいてもらいたい。しかも、それを知るということは、ただ過去の事実についての知識としてではなくて、あなたと同じように若かった先輩が血を流し、肉をそがれて体験したことを、あなた自身の体験として身につけていただくということである」(日本戦没学生記念会 1959: 5)と強調しているように、これまで学徒兵の戦争体験については、吉田が自身の戦争体験を突き詰めて得た③と④のような点が重視されてきたように思われる。いわば学徒兵たちの平和を求める思想的実感を私たちは受け止めてきたわけだが、彼らの軍隊生活における生活的実感についてはさほど注意して受け止めてこなかったのではないか。

今日、学徒兵<sup>1)</sup>と「わだつみ」とは同義語のように話される。『きけわだつみのこえ』(日本戦没学生手記編集委員会 1949)は反戦の書として読まれ、平和運動やメディアの言説によって思想信条に反して従軍させられ戦没した悲劇の学徒兵という「わだつみ」イメージが作られた(福間 2009)。しかし、彼らは反戦思想から軍務に消極的となってサボタージュしたわけでも<sup>2)</sup>、職業軍人や古兵から追い回される受動的な軍隊生活に終始したわけでもない。彼らの多くは軍務に精勤したのである。

これまでの学徒兵に関する学術研究や知識人の関心は、まさに学徒兵のこうした〈精勤ぶり〉の「謎」の解明に向けられてきた。彼らの〈精勤ぶり〉が

「謎」とされるのは、研究者・知識人の側に、当時最高の教育機関で西洋の教養を学んでいた学徒兵ならば、戦争や軍隊に反発する心性を培っていたはずであるとすると基本認識があるからと思われる<sup>3)</sup>。そして、その「謎」に答えようとする言説には様々なものが見られる。国家の原犯罪に対して反対犯罪を行う勇氣に欠けた順法精神(鶴見 1968)、任務に献身する求道的で過剰な誠実主義(安田 1977)、「主体的(後に自主的と変更)役割人間・過程型」という人間類型(森岡 1993)、さらに皇国・軍国イデオロギーを自己流に「誤認」して任務の意義を見出した「彼らなりの世界観や美意識」(大貫 2006: 46)などによって学徒兵が軍務に精勤した理由は論じられてきた。

だが、岩井忠熊が戦没「学徒兵の手記はしばしば思想が生活に先行している」(岩井 1991: 217)とすでに指摘しているように、これらほぼ遺稿に基づく学徒兵論は、学徒兵の世界観、戦争観、死生観などの思想<sup>4)</sup>を考察しても、軍隊生活と引き合わせて学徒兵を考察する視点が不十分であった。そのため、学徒兵が軍務に精勤した理由を、主に学歴エリート層の思想や世代の特性によって説明してきた<sup>5)</sup>。学徒兵の多くがそうした特性を複雑に合わせ持つことは否定しえないが、彼らの〈精勤ぶり〉はそれだけでは説明できない。学徒兵が軍隊生活で日々どのような経験をして過ごしてきたのか、いかに軍務をこなしてきたのか、彼らの日常の〈生き方〉にまで目を向けなくては、彼らの〈精勤ぶり〉は十分に理解できない。軍隊生活こそ彼らの戦争体験の核心である。学徒兵が軍務に精勤したことについては、思想だけでなく、彼らの軍隊生活での〈生き方〉にも目を向ける必要がある。そして、こうした〈生き方〉は軍隊生活にとどまらず、戦後の彼らの日常生活にも影響を及ぼしたものと推測される。軍隊生活で培われた〈生き方〉は、生還学徒兵のその後の人生を理解する上でも重要である。

本研究の目的は戦争観が大きく異なる三人の元学徒兵のライフストーリーを基に、軍務に精勤した彼

らの〈生き方〉を明らかにすることにある。とくに、印象的な出来事のライフストーリーに基づいて日々の生活の様子を記述し、彼らの〈精勤ぶり〉を支えたものがいかなるものであるのか解明する。彼らは戦争と軍隊とを快くは思っていなかったが、徴兵制という強制力によって入営を余儀なくされてからは、具体的な状況として向き合った社会的世界のレベルでそれぞれの〈生き方〉を模索しながら軍務に精勤し、好むと好まざるとにかかわらず戦争の担い手となって外部環境としての戦時社会を支えていった。戦争体験の風化が進む今日、思想的には決して好戦的でなく教養も高かった彼らが、軍隊生活では優秀な将兵となった社会的メカニズムを研究する意義は、社会制度として戦争と軍隊とを認める国となれば、青年の多くはそれぞれ独自の〈生き方〉を模索しながら戦争と軍隊とを支えていってしまうことを予測させる知見をリアルな語りと共に記述する点にある。そして私たちは、冒頭に掲げた吉田の警鐘を、思想の実感と共に生活的実感としてもより深く理解できるようになるだろう。

## 1 データと分析方法

### 1・1 データの概要と妥当性

本研究は筆者がインタビューした元学徒兵A氏、B氏、C氏<sup>6)</sup>のライフストーリーを分析データとする。A氏には2015年5月から30分程度の電話インタビューを12回行った。B氏には2008年11月に3日間で計15時間のインタビューを行った。C氏には2005年7月から1時間程度のインタビューを34回行った。また、各人の戦争体験についての手記も分析データとして用いた。A氏は1980年代に同窓会誌に戦争体験を書いており、そこでのプロットや強調点は筆者がインタビューで得たライフストーリーでも繰り返されている。B氏も同年代に地方公共団体の自分史講座の文集に戦争体験を書いており、やはりそこでのプロットや強調点は筆者がインタビューで得たライフストーリーでも繰り返されている。

今日のライフストーリー研究では、語り手と聞き手によるライフストーリーの構築性が強調される。ただし、語り手の語るライフストーリーの一貫性・自律性という側面にも目配りは必要である。ライフストーリーを〈物語世界〉と〈ストーリー領域〉の二つの位相に分けて考える桜井厚によれば、体験がプロットで構成される〈物語世界〉を構築する主体は主に語り手で、そうした〈物語世界〉の評価にかかわる〈ストーリー領域〉を構築する主体は語り手と聞き手の相互性であるとする（桜井・小林編 2005: 44-5）。そして「〈ストーリー領域〉は、たしかに〈いま-ここ〉という時空間で理解できるにしても、それに基礎づけられた〈物語世界〉は、語り手主導によるプロット化の限定に応じてインタビューの場から一定の自律性をもった物語、過去のリアルさをもって成立しているのである。対話的構築主義といえども、この限定を見極めておくことが必要である」（同 45）という。A氏、B氏の手記からは、すでに30年ほど前から〈物語世界〉としての戦争体験は一貫性・自律性をもって彼らの精神世界、〈生き方〉の一部を構成していたことがうかがわれる。

C氏も戦争体験の断片的な出来事について、新聞の投稿欄や同窓会誌などに折々に書いてこられたようであるが、日本軍から逃亡したことについては、他者には理解されないという思いが強かったので、筆者のインタビューを受けるまで書いたり語ったりしたことはなかったという。インタビューでは戦争体験がほぼ年月順に理路整然と語られた。中野卓は『口述の生活史』の基となったインタビューの状況について「話は、問わず語りにはひとりでもどんと展開し、私はほとんど問いを重ねる必要もないほどでした。……私のもっぱら聴き手で、ときおり、自然と発してしまう共感の声があるだけと言っていいくらいでした。面接調査者としての、かまえた設問や、不自然な相槌の発言などは、する気にもならなかっただけでなく、必要もなかったのです」（中野編 1977: 5）と述べている。C氏とのインタビューの状況も、これとほぼ同じような雰囲気であった。

その意味では、C氏の〈物語世界〉としての戦争体験も、一貫性・自律性をもって筆者と出会う前から彼の精神世界、〈生き方〉の一部を構成していたのではないかと考えられる。

戦争体験についての意味づけというものは、時代と共に社会的にも個人的にも変動するものである。本研究のデータとするライフストーリーも当然ながらインタビューの〈いま-ここ〉で語られる構築性、あるいは‘ひずみ’がある。中野によれば「想起における主なひずみは、人生の記憶の全部を網羅的に再構成などできないため、いまの自分の判断で大切と思うことだけを選択しつつ空間的にも時間的にも圧縮されている点であり、また当時の自分の視野からみたりリアリティの記憶を基礎として、現在の自分の視野から過去のリアリティをどのように再現するかが構想され脈絡付けられている点である」(中野1995: 208)。ただし、‘ひずみ’とは事実の歪曲といった否定的なものではなく、語り手による体験の解釈であり、独特の〈生き方〉による人生の足跡でもある。「過去や現在の「現実」を社会学が観察・分析にもとづいて「再構成」するのは、「客観的事実」を再現しようとするのではなく、……「現実」をどう解釈したか」(同 195-6)である。その意味では、本研究で用いるライフストーリーは、戦争体験を当事者の解釈、つまりは〈生き方〉の回想に寄り添って考察できる妥当なデータと言える。

## 1・2 語り手の戦争観の位置づけ

A氏、B氏、C氏の生活史、軍歴等はそれぞれ大きく異なる。ここでは、とくに彼らの軍隊生活での〈生き方〉に影響を及ぼしたと考えられる戦争観について、同世代の元学徒兵たちが抱いていたとする戦争観の傾向のなかに位置づけておきたい。

慶應義塾大学の白井ゼミナールでは、太平洋戦争中に在籍していた同窓生7500名にアンケート(質問紙法)を行い1681名から回答を得た(回答率22.4%)。アンケートには「学生時代には、太平洋戦争についてどのように考えていましたか?」という質問があ

り、「アジア解放の聖戦(正義の戦い)」「自衛のためやむをえぬ戦い」「勝てるはずのない戦い」「帝国主義戦争」「その他」という選択回答を用意した。回答の結果は「自衛のためやむをえぬ戦い」が61%と最も多く、「勝てるはずのない戦い」が18%、「アジア解放の聖戦(正義の戦い)」が8%、「帝国主義戦争」が4%と続く(白井監修1999: 87)。慶應義塾大学は当時から自由主義的な学風で知られており、アンケート結果が全国的な学生の戦争観の傾向を代表しているとは言えない。また、回答者によっては選択回答が重複すると感じた場合があったはずである。例えば、「勝てるはずのない戦い」という選択肢は、勝てるはずのない「自衛戦争」、あるいは勝てるはずのない「聖戦」、あるいは勝てるはずのない「帝国主義戦争」などのように、いかようにも続く余地を残した曖昧なものである。しかし、そうした限定性・問題性はあっても、これまで「多くの学生は聖戦を信じていた」といったような表現で語られることが多かった学生の戦争観の傾向について、数量で示したアンケートは貴重な試みである。

上記のアンケートに当てはめれば、A氏の戦争観は「アジア解放の聖戦(正義の戦い)」というカテゴリーに含まれ、B氏のそれは「勝てるはずのない戦い」というカテゴリーと「自衛のためやむをえぬ戦い」というカテゴリーとに重なって含まれ、C氏のそれは「帝国主義戦争」というカテゴリーに含まれる。このように、本研究の対象とする三人の元学徒兵が抱いた戦争観は一応それぞれ「聖戦」観・「自衛戦争」観・「帝国主義戦争」観の傾向に区分される。そして、元学徒兵が持っていた戦争観の全体的な傾向のなかでは、とくにC氏のような戦争観を持つ者はごく少数だったことには注意が必要である。

こうした戦争観の傾向の違いは、後述するライフストーリーで明らかになる人生遍歴のなかで複雑に生じてきたものではあるが、参考までに「教育体験」の違いに基づいた世代区分による説明も紹介しておく。安川は「わだつみ世代」について、a「前わだつみ世代・マルクス主義思想残光期」(1908~19

年生まれ), b「わだつみ世代・自由主義思想残光期」(1920~22年生まれ), c「わだつみ世代・自由主義思想消滅期」(1923~25年生まれ)などに区分し, 「a世代は, マルクス主義思想に接触しうる可能性をもった世代で, 体制批判意識や軍隊批判意識がたかく, 国のために死のうという意識や覚悟は見られない。自由主義への憧れを一つの特徴とするb世代は, a世代に対比して体制批判意識や軍隊批判意識は後退し, 特攻死などを迫られた最初の世代として, 自由主義と国家主義の思想的分裂・葛藤に悩みながら, 国のために死ぬ「運命」の受容に傾いていった。c世代は, 高等教育機関に学びながらも, 体制批判意識や軍隊批判意識を獲得する機会そのものを閉ざされ, b世代のように死ぬことに葛藤する比率も低下し, 逆に殉国意識をもつ学生が増えている」という(安川 1997: 83-4)。この区分に当てはめれば, A氏は出生年ではc世代だが, 早生れなので学年ではb世代とも言える。B氏はc世代で, C氏はa世代となる。主に『きけわだつみのこえ』などの遺稿集の分析による安川の世代区分の試みはさらなる検証が必要であるが<sup>7)</sup>, とくにA氏・B氏とC氏の間には「教育体験」の世代的な断層<sup>8)</sup>があることだけは強調しておく。

### 1・3 分析方法

各人の軍隊生活における〈生き方〉はライフストーリーのテーマとして把握することができる。ライフストーリーでは, 語り手によって人生における出来事と出来事とが独特に結びつけて意味づけられ, 一連の出来事の過程で自分はどうのように振舞ったのか語られる。そして, ライフストーリーを通観するとき, 自ずとテーマが浮かび上がる。それは語り手の〈生き方〉と言えるものである。

分析はまず, 各人の軍隊生活における〈生き方〉に根本的な影響を及ぼしたと考えられる日々の出来事や経験を明らかにした。その上で, 軍隊生活における〈生き方〉を, 各人のライフストーリーから象徴的ストーリーを選んで再構成した。再構成の技法

としては, 「表現と不可分に結びついた形でしか存在しえない「経験というもの」(井腰 1995: 115)の特性上, 語り手のレトリックを活かして, 聴き手(研究者)の理論的解釈と主観的解釈とのコンビネーションであるコメンタリー(Atkinson 1998: 71-2)に織り込む工夫をした。

宝月誠は, 物語的方法のメリットについて, 「主題とする社会的世界の様相やその世界での出来事の生起を, 具体的な空間・時間的文脈において, 詳細に, さまざまな複雑な要素の関連を考慮に入れて, 過程的・生成的に記述し解釈していくことを可能にする点である。……とりわけ, 社会生活に見出される創発的な過程を把握するにはこの方法が有効」(宝月 2000: 41-2)と強調する。各分析項目は, 抽象的にまとめるのではなく, 具体的な時空間のなかで過程的に捉えるように記述した。また, 森岡清美が指摘するように「軍隊経験だけでなく, 学徒兵にとってはその前段階をなす学校教育, 地方出身者にとっては近隣や町村での生活経験が問題である」(森岡 2013: 4)。よって, 兵役を意識し始めた学生生活を, 元学徒兵の〈生き方〉の基点として分析を始めた。

## 2 〈生まじめ〉な軍隊生活

本節のライフストーリーの語り手A氏は, 大正12(1923)年生まれの大阪育ちで現在93歳。実家は従業員約百名を雇うメリヤス製造工場を営んでおり, 戦前・戦中の暮らし向きは中間層に位置づけられる。戦後は紡績会社で労務・工場管理の道一途に過ごし, 主力工場の取締役工場長となる。

### 2・1 学生生活

A氏は中等教育を大阪府立高津中学校で受け, 漱石全集, 世界文学全集, 世界大衆文学全集などを読み耽る一方, 剣道に打ち込む文武両道の少年であった。また, 「典型的な軍国少年ですね」というA氏は, 陸軍士官学校, 陸軍経理学校, 「満洲国」陸軍軍

需学校を受験し不合格となる。そこで、将来は「満洲国」に行きたいという思いがあったので東亜同文書院大学を受験するも不合格となり、昭和15(1940)年5月に第二志望の神戸商業大学(現・神戸大学)予科に入学する。

予科は全寮制で「元町通をストームして、踊り狂って歩いたり」して、旧制高校の文化を「まったくそれ、模倣してましたね」という。A氏は学生生活を「まあ、勉強もそこそこに、剣道やって、お酒飲んで、暮らしてましたからね。まあ、どっちかというところ、‘不良学生’でしょうなあ」と振り返る。休講のときなどは「本館の前の、青い芝生の斜面に、友達と寝っ転がって、うだうだ言って、灘五郷の酒蔵のあるところの街並見たり、大阪湾見たり、向かえの淡路島を眺めたりして、駄弁ってました」と、学生生活はのんびりと過ごせた。

A氏は「満洲、いまでいう中国東北部ですね、そこで五族協和で楽園を造るんだということは信用してました」という。卒業後は渡満しようと思ひ、予科での第二外国語は中国語を履修した。日中戦争と続く日米開戦については「アメリカ相手っていうよりは、中国相手のね、満洲国、五族協和でやろうとしてんの、何で文句言いやがるんだっていうことの方が多かったですから……アメリカは何でそんな中国の片棒担ぐんやという、アメリカ憎し」という「聖戦」観を持っていた。戦勝の可能性については「アメリカの国力も軍事力も分かりませんやんか。だから、精神力だけで勝てるなんて、普通は考えないですよ、常識的に、いまの世の中であれば。それを、半ば信じてたんだから、バカな話ですよ」と振り返る。

多くの学徒同様、A氏も戦死する可能性については「時代の宿命だという感じで諦めてたっていうのが本当でしょうね」という。しかし、ある日、元町の路地裏で易者に占ってもらったことが死生観の変わる転機となる。易者は「お兄さん、あんた珍しい長生きの運を持ってるよ。66~67歳まで生きる。おめでとう」と占った。A氏は「何アホなこと言うて

んねん。僕は大学出たらすぐ兵隊にとられ、戦地に送られ、99.9%戦死か戦病死や。アホも休み休み言え」と反論すると、易者は「そやけど、私はこの卦に自信持ってる。必ず生きて帰ってくる。自信持ちなさい。おじさんを信じて」と励ました。A氏はその後の軍隊生活で、何度か生死の境に直面するたびに、頭の片隅でこの易者の言葉を思い出し、「俺は絶対戦争で死なん」と確信し続けることになる。

A氏は配属将校に反発することもなく、学生生活において軍人や軍隊を特別に嫌悪する気持はなかった。A氏には三人の兄がいて軍隊の私的制裁についても聞いてはいたが、「軍隊の悪いところを変えてやろうぐらいの意気込みで、出征するときの挨拶もそんなようにした記憶がある」という。

## 2・2 私的制裁から逃れるために士官を目指す

昭和18(1943)年12月の「学徒出陣」で、A氏は私的制裁をなくしてやろうと「理想に燃えて」入営する。ところが、古兵からの私的制裁は、兄たちからの伝聞以上に激烈で「おしっこちびったことがありますね」という。「これは殴られっぱなしでしょうがないから、これより逃げるには、甲種幹部候補生<sup>9)</sup>に、試験に受かるよりしょうがない」と、A氏は私的制裁と慢性的な空腹感とに耐え、軍人勅諭を必死に暗記し課業に勤しんだ。

亡国の危機を救わんと純真な気持ちで入営した学徒兵のなかには、軍隊内の凄惨な私的制裁に絶望して厭戦的、反軍的になる者もいた。内務班でA氏の隣に寝ていた京大出身の学徒兵が消灯後に「しんどいなあ、えらいなあ」と言うので、A氏は「甲種幹部候補生合格して、どっか知らんけど、予備士官学校行ったら楽になるから、お互いもうちょっと我慢しろや」と励ましたが、ついに彼は逃亡してしまう。A氏は「兄貴にも聞いてましたし、軍隊ってこんなもんやと思ひ込まされてましたから。まあ、辛抱してりゃ、そのうち、士官になりゃ、自分が(軍隊の悪習を)直してやらあ、ぐらいの気持ちでしたからね」というように、軍隊での社会的地位を高

めることで、軍隊生活の問題に対処しようと課業に勤しむことになる。

### 2・3 陸軍予備士官学校から南方へ

翌年5月、甲種幹部候補生に合格したA氏は仙台陸軍予備士官学校に入校する。「びんたづけの初年兵時代と違い、ここでは紳士扱いをされ<sup>10)</sup>、東の間の楽しい軍隊生活を味わいました」。しかし、教育も半ばの9月、戦局の悪化に伴い、初級将校の補充を確実にしたい陸軍は、多くの候補生に南方軍転属の命令を下す。A家は兄弟全員が従軍していたので、A氏は内地に残される予定であったが、南方軍転属の人員が増え、区隊長から「貴公よりハードルの高い母一人子一人の候補生もおり、申し訳ないが南方へ行ってもらいたい」と言われる。A氏は「感謝してお受けします。喜んで行きます」と答えた。

輸送船の故障や空襲による港湾への退避などで、9月末に博多を出発した南方軍転属部隊が、目的地であるマレー半島ポートディクソンの南方軍下士官候補者隊に辿り着いたのは翌年2月末であった。ここで残りの予備士官教育が行われ、6月末にA氏らは見習士官に昇進、各配属先へと赴任した。軍国時代のエリートである将校となったことについては、「いや、べつにそんな誇りなんかありません、(兵隊の身分を脱して) やれやれ、ちゅうわけですな」という認識であった。

### 2・4 他者の期待に応えて

A氏は第7方面軍直轄部隊である第46師団歩兵第147連隊に所属する機関銃中隊付見習士官として赴任、マレー半島南部の東海岸で守備に就く。「で、中隊に行きましたらね、最新の見習士官の知識を皆に与えろってということで、兵隊にそれを教えるわけですがね」。A氏自身、実物は見たこともない刺突爆雷の模型を自作し、戦車の模型に向かって突かせる訓練を指導した。「そのときはまじめにやったりしたけどね、(戦)後から考えたら、まあ、バカな話だなと思って。中隊長以下、たまじめでやってまし

たからね、それ」。

ここで注目したいのはA氏の訓練に対する(生まじめ)な態度である。予備士官学校で習った腰に構える方法では狙った所に当たらない。「だから、こっちの発想で、肩の上に持ち上げてね、で、棒高跳びの棒みたいにして、持ち上げるみたいにして、ダンと突くように勝手に変えて訓練しましたけどね」。予備士官学校で習ったとおり、形式的な訓練にすることだってできたはずだが、A氏に戦技改良のアイデアを絞らせたのは何だったのか。「アイデア絞ってというより、苦し紛れですよ。それは、皆、最新知識を持って赴任してきた見習士官だって見えますからね、いい加減なことできませんわな」。

A氏は新任の見習士官という社会的地位に伴う責任と期待に応えようと精勤する。一方、「相手は鉄の塊だし、砲台は上の方にあるしね。こんなもん、勝てるはずないじゃないですか」とも考えていた。戦勝に半信半疑でも、他者の期待に応えようと軍務に精勤したことについて、A氏は「ま、予備士官学校でそういう教育受けたからでしょうね」と解釈する。

### 2・5 抑留体験で感動した勤勉な兵隊たちの姿

赴任から一月半ほどで終戦となり、A氏の部隊はレンバン島に翌年7月ごろまで抑留された。レンバン島抑留者がおかれた概況を公刊戦史は次のように記している。「20年9月中旬、シンガポール島及び南マレー地区の方面軍直轄部隊、第3航空軍隷指揮下部隊等は、南マレー軍(軍司令官 木下敏中将)を編成して終戦処理に当たることになった。そして10月初め、これら南マレー軍約8万(第29軍を含む)の将兵は、リオ諸島のレンバン島(面積約140平方秆)、スマトラ及びジャワの将兵はガラン島(面積約85平方秆)と両無人島への移動と現地自活を強いられ、21年7月復員輸送が完了するまで、栄養失調及び疾病との苦難の闘いを続けたのである」(防衛庁防衛研修所戦史室 1976: 444-5)。とくにレンバン島は「恋飯島」とも書かれたように、多くの将兵

が飢餓に苦しんだ。「20年10月18日に第一陣千人がレンパン島に上陸した際に持ち込んだ食糧150トンのあとに続く補給がなかったため、数日おきに上陸してくる後続の日本兵に配給する食糧がたちまち枯渇した」(田中 2010: 90) ためである。12月に英軍からレーション(携帯口糧)が配られると食糧事情は改善に向かう。翌年からはタピオカ(キャッサバの芋)なども収穫され始め、部隊全滅の危機は回避された。ただし、レーションも1食分を1日分として食いつないだために満腹感を得ることはなかったという。

A氏も飢餓で苦しんだことを強調して語ったが、それ以上に彼のレンパン島抑留生活で強く印象に残ったのは復員部隊が使用するトイレ管理に精勤した兵隊たちの姿であった。復員船が往来するようになってから、A氏の部隊は全島から港に集結する復員部隊のトイレ管理を任される。数万の将兵が使用する宿舎のトイレ管理は、防疫対策から英軍の指導による厳格なものであった。トイレの「深さは背の高さぐらいですかね。腰までか、いやもうちょっと胸までぐらいですかね。で、長さは、五、六メートルでしょうか。その上に、レーションの空き箱をばらして蓋をして。で、うんちするところだけ穴開けて、そこへまた板でスライド式に蓋をして。だから、並んでやるから前にやってる連中の尻は丸見えですわな」。そして「満杯になると土で埋めて、また新しい穴を作る。これのくり返し」。A氏は臭気に耐えながら数カ月も「文句一つ言わず作業を続け、任務を全うした小隊員の勤勉さと努力、規律の正しさは感に堪えず、もし論文に取り上げて頂けるのなら、他のすべてを削除しても、これだけは必ず載せて頂きたいと切望します」と強調する。

以上のライフストーリーから明らかのように、A氏が語る軍隊生活での〈生き方〉は〈生まじめ〉な〈精勤ぶり〉の連続である。A氏は戦後の生活でも困難に直面する度に「こんな辛さも、トイレ管理の苦勞に比べれば、何ほどの事も無い」と思って一生

懸命がんばってきたという。A氏の一貫した〈生き方〉は与えられた任務に〈生まじめ〉に対処して精勤することであった。A氏のこうした〈生き方〉が照らし出す軍隊生活での学徒兵のリアルな〈精勤ぶり〉については、B氏、C氏と合わせて後に改めて考察する。

### 3 〈生きがい〉を感じた軍隊生活

本節のライフストーリーの語り手B氏<sup>11)</sup>は、大正12年生まれ(1923)の東京育ちで現在92歳。実家は従業員五、六名を雇って神田駅前(現青果店・フルーツパーラー)を営んでおり、戦前・戦中の暮し向きは中間層に位置づけられる。戦後は稼業を変え、都内数か所で文具店を経営する社長となる。

#### 3・1 学生生活

「小商人の倅」を自称するB氏は、中等教育を東京市立京橋商業学校(後に芝商業と改称)で受ける。旧制高校・旧制帝大に進学するような当時のエリート学生が中等教育を旧制中学で受けて「思想的教養」を培っていた時期、B氏は珠算塾に通い、簿記や商業法規に通曉する「実学的教養」を培っていた。後に軍隊生活を合理的に改良しようとしたB氏の教養の原点は、商業学校での教育まで遡る。

昭和16(1941)年4月、就職するよりも、もう少し学生生活を楽しまたいと考えたB氏は「学問の深奥までも勉強する気のない私にはぴったりの」慶應義塾高等部(現慶應義塾大学)に入学する。1年生のときこそ「全優」であった成績も、剣道部の稽古やクラス委員の仕事の多忙さ、さらには2年生から始めたNP(軟派の隠語)目的の銀座通いも崇って悪化する。B氏は銀座を「級友と歩いてお茶を飲んで、駄弁っていると楽しい」という、やや「不良」の「慶應ボーイ」であった。

軍国少年であったB氏にとって、学校での軍事教練は「軍国時代だから、軍人の訓練は面白いはずだが、同じことの繰り返しで、飽き飽きしてしまう」

ものであった。昭和17（1942）年10月には学内に報国団が結成されて軍事色が強まり、クラス運営について配属将校に抗議したこともあった。しかし、学内自治に侵入する軍国主義への反発が、配属将校に象徴される陸軍に向けられて反陸軍性という心性を培ったことは、B氏が親海軍性という心性を培ってゆく契機ともなった。「学徒出陣」後も、B氏は陸軍を比較準拠集団にして、「科学的・合理的」な海軍での生活はまだ恵まれていると意味づけ、軍隊生活に適応してゆくことになる。

高等部1年生のときに日米開戦となる。商品学の教養のあるB氏は、開戦の報に大喜びする伯母（東京大空襲で従妹と共に戦没）に日米間の国力差を説くが、「日本ってのは、よその国と戦争して負けたことないんだから、大丈夫よ、必ずこの戦争勝つに決まってるんだから」と反論される。その後、真珠湾での戦果が発表され「これはひょっとしたらいいところまでいけるんじゃないかなと思って、……戦機としてはいましかしょうがなかったのかって」思うようにもなる。

‘実学的教養’で戦勝に疑念を持っていても、親類縁者を始め身近な他者の〈草の根の軍国主義〉（佐藤 2007: 143-4）に気圧されてしまう時代であった。それでも、戦況が悪化した「学徒出陣」のころには、戦勝を再び疑い始めていた。なお、B氏は大東亜共栄のための「聖戦」という大義を信じたことはなく「資源の配分をめぐる戦争」という戦争観を持っていた。

昭和18年12月、B氏は生還を期して「学徒出陣」し、従軍中も「死ぬとっていなかったすね」という。ただし、戦死の可能性を考えなかったわけではない。「家の近所の、親一人子一人の米屋があって、そこの一人息子が親孝行で、ほんとに、どっから見ても立派な息子だったんだけど、それが兵隊に、召集が来て、行くときに、母親はもうワーワー泣き、息子も行きたくなくてワーワー泣いて出かけたんですよね。したら、間もなく戦死しちゃったんですけどね。……だから、あまり、そんなときに、死にたく

ないっていうことを言っちゃいけないなと思いましたね」とも語っているように、縁起をかつぎ戦死の可能性をあえて考えないことにした側面もある。

### 3・2 憧れの海軍将校を目指す

B氏は戦勝も戦争の大義も信じないで海軍での軍隊生活を始める。「学徒出陣」が決まったころは、「同年配がみんな戦地に行ってるんだから、しょうがないねえという感じ」でいたB氏だが、海軍予備学生<sup>12)</sup>に採用されてからは軍国少年性をくすぐる軍事学、知識欲を満たす航海学や物理学など座学を学ぶ日々は「楽しい」ものとなる。

慢性的な空腹感の辛さはあったものの、剣道で鍛えた体力のおかげで、日々の課業もさほど苦労なくこなしてゆけた。区隊長たちから猛烈な鉄拳制裁を受けたが、区隊長自身が学徒出身なので「兄貴たちの愛情のこもった一発でしたから素直に殴られました」という。職業軍人と反目した先輩学徒兵の叱咤激励は、学徒兵としての強烈なプライドを要求するものでもあった。課業に積極的に取り組む態度が評価され、B氏は甲板学生や班長といった役職を任される。B氏は「クラス委員精神で一緒にやってみようって感じで」同期生の世話役に張合いを感じ、軍隊生活に〈生きがい〉を感じ始める。

同期の学徒兵たちに囲まれ、予備学生の基礎教程では「自習時間はお互い想い出話で時間をつぶしていました」と、学生生活の延長のような気分でもいたB氏だが、術科教程に移ってよいよ任官が迫ってくると、部下の命を預かるという将校の重い責任を自覚し始める。「私がほんやりすると簡単に殺されてしまうのだろう。私が死ぬと兵隊も犬死にさせられるのです。皆、真剣になるのです」。例え戦争に疑念をもっていても、自己の社会的地位に人の命がかかっている以上は、否応なしに軍務に精勤せざるをえない状況に追い込まれてゆくのである。

### 3・3 将校の任務に感じた〈生きがい〉

昭和19（1944）年12月末、B氏は憧れの海軍将校

となる。「時代が時代で、士官になるというのは名誉ってことですからね。……兵隊さんのしょぼしょぼしてんのじゃなくて、将校になれたってことは、弟たちもいるから、そういう点では両親は肩身が広がったと思いますよ」と誇らしげに語る。

当初、B氏は横須賀海兵団付となるが、定員分隊での仕事はデスクワークの監督で、苦勞して学んだ陸戦専修の知識を活かすことができない。そこで、B氏は実施部隊を志願して大船に新設された特別陸戦隊付となる。米軍上陸が予想され、海兵団よりも実施部隊にいた方が安全ではないかという目算もあったとはいえ、「せっかく苦勞した陸戦の知識と実技を活かすチャンスが全くない」という不満は根強いものであった。比較的 안전한海兵団での勤務を辞めてでも、実施部隊で兵隊を指揮してみたいと志願したのは、B氏が少年時代から培ってきた軍国少年性、将校の責任の自覚、あるいは学徒兵としてのプライドなどが複雑に結びつき、将校としてさらなる〈生きがい〉を求めたためと解釈できる。

水兵や予科練出身者を寄せ集めた新設の陸戦隊において、陸戦専修の将校であるB氏は何かと頼りにされた。本部での副官業務に始まり、陣地構築の進捗確認や兵員の陸戦訓練の指導、さらに慰問の設定や休暇の調整、人間関係のトラブルの解決など、B氏は獅子奮迅の活躍をした。とくに注目すべきは、軍務についてB氏が自身の権能の範囲で工夫を凝らして精動したことである。例えば、「塹壕掘りのする所に民家なんかあるから、そこを借りて食事をすることにさせようと私が提案したら、それを採用しようってことになって……少し小遣いを出し合うとか、勤勞奉仕をするとかすれば、ちょっと一味違った食事が期待できるじゃないかと私は期待して」。

B氏の軍務は主に下士官兵の生活の世話であった。クラス委員などをこなしてきた世話好きなB氏は、軍隊生活の問題を見つけては改善すべく、創意工夫しながら打ち込めることに〈生きがい〉を感じていた。B氏には空襲の被害もなく、たまには気晴らしに懇意な間柄にあった女性の自宅に出かけては「秘

密のサロン」として楽しんだ。軍隊生活については「山田隊(所属部隊の通称)発足して、フンジンとはいかないけれど、その時は私の青春でありました」と懐古する。

以上、B氏が語る軍隊生活での〈生き方〉は、軍務に精動することに〈生きがい〉を感じていた点でユニークである。戦後も社長として仕事に〈生きがい〉を感じて生きてきた。また、仕事の合間を縫っては戦友会会報や業界紙、大学新聞などへ戦争体験の手記を寄稿することに〈生きがい〉を感じてきた。B氏の一貫した〈生き方〉は何事にも〈生きがい〉を見出して精動することであった。

#### 4 〈反抗心〉を秘めた軍隊生活

本節のライフストーリーの語り手C氏<sup>13)</sup>は、大正7(1918)年生まれの福島育ちで現在98歳。父親は銀行員で戦前・戦中の暮し向きは中間層に位置づけられる。戦後の一時期、共産党員となって労働争議に明け暮れた。離党後は紙芝居屋、納豆売り、新聞配達等を掛持ち、苦勞の末に文具店主となる。

##### 4・1 学生生活

C氏は中等教育を地元の旧制中学で受け、石川啄木に深く傾倒する一方、剣道部でキャプテンを務める文武両道の少年であった。官立の高等商業学校を受験して不合格となった後は一年間、東京で浪人生活を送り、昭和11(1936)年4月、苦手な数学の試験がなかった慶應義塾高等部に入學する。入學して間もないころ、二・二六事件のために上京してきた中学時代の配属将校と銀座で邂逅し、気前よく「飲め飲め!」とビヤホールでおごってもらったことがあった。C氏も学生時代までは軍人や軍隊を特別に嫌悪する気持はなかった。

翌年には日中戦争が始まる。しかし、C氏の関心は薄く、とくに軍事教練が厳しくなることもなく、マルクス主義を匂わす講義をする教員もまだいた。

「いわゆる大正デモクラシーの余韻の一番最後ですよ」という。後にマルクス主義に傾倒するC氏だが、高等部では「学者になるんじゃないからねえだから、あんまり学問に深入りするより、スポーツであるとか、カレッジライフをエンジョイする、その方に頭いていたのね」。剣道部に所属したC氏は、道場で車座になつての宴会や銀座のピヤホールで祝勝会を繰り返す部活動を満喫する。大学本科へ進学することもできたが「勉強はもうたくさん」と就職の道を選んだ。

#### 4・2 社会人生活

昭和14（1939）年4月、仙台鉄道局に就職したC氏は、郷里に近い郡山駅で貨物掛の雇員として働き始める。間もなく徴兵検査を受けて甲種合格となるが、入営直前に肋膜炎を患い即日帰郷となる。翌年に再度受けた徴兵検査では第二乙種の補充兵役となり、いつ召集されるか分からない補充兵役の不安定な身分に悩むようになる。

C氏は父親を日露戦争で戦艦朝日に乗り組んだ「日本海海戦の勇者」と尊敬する。C氏も入営が決まった当初は、兵役を国民の当然の義務と考えていた。ただ、それも現役入営なら覚悟も決まるという消極的なもので、外地で軍需産業に就職すれば召集が延期される制度（法政大学大原社会問題研究所1964）を知ってからは、兵役を逃れたいと思うようになる。また、C氏にとって鉄道局の仕事は満足のいくものでなかった。当時の国鉄は出身学校が官立か私立かで昇進に差があり（吉田・広田編2004）、仕事に嫌気がさしていたときに満蒙毛織の募集を目にする。C氏は「もう支那に行こうと、満洲でもいいやと」両親の反対を押し切り渡満した。

なお、‘合法的徴兵忌避’を選んだのは、C氏が駅員であったことも関係していると考えられる。当時、泥沼化した日中戦争での戦死者は増え続け、郡山駅という福島県の交通網の結節点においては、各農村へ送られる戦没者の白木の箱を見る機会が人一倍多く、戦死への不安が視覚的にリアルに募ったのでは

ないだろうか。

昭和16年1月、C氏は満蒙毛織北京工場に配属となるが、赴任直後に体調を崩して同仁会病院に入院してしまう。そこで、C氏を「コペルニクスの転回」に導いた終生の友S氏と出会う。S氏は国策団体の新民会で働いていたが、C氏に天皇制の誤りとマルクス主義の正しさを熱心に説いてきた。大陸浪人然として言動のスケールの大きいS氏に心酔して、C氏はすっかりマルクス主義に傾倒し、満蒙毛織の軍国調の社風に嫌気を起こして退社してしまう。しかし、生活のためには就職先を見つけないければならず、興亜院に勤めていた慶應義塾OBのつてを頼り、同年9月に華北劳工協会<sup>14)</sup>に勤める。企画課の調査部門に配属となったC氏は、調査のためと称してマルクス主義の文献を読み込む日々を続けた。

昭和18年7月ごろ、C氏は企画課長に誘われて宣化の龍烟鉄鉱に転職する。労働者が死ぬと鉄鉱山の裏に死体を投げ捨てるような職場であった。労政課に配属となったC氏は、労働者を集める仕事にも従事した。「金を把頭で預けて『これで何人、集めてこい』と。……そういう人買いだね」。マルクス主義の理想と帝国主義の現実との矛盾に悩むこともなく、C氏は臨時召集となる日まで日常生活を淡々と送っていた。

C氏はマルクス主義に傾倒してから反戦思想を培い始める。しかし、戦争に反対でありながらも、兵役を免れるためには軍隊と共に戦争を支える軍需産業や国策機関で糊口を凌がねばならない。C氏も観念的には、自身の仕事が中国に対する侵略に加担していると意識していたが、日常生活においては「私も侵略者の国の一員としての考え、受け止め方しかないわけだ、もうね」という。当時の中国は国共合作後も内部対立が続き、地方では依然として軍閥が力を持ち、親日的な地方政権も存在するという複雑な政治状況にあった。前線から遠い北京では中国人との‘共生’も可能であり、日常的に侵略を強く意識する機会がC氏にそうあったわけではない。

#### 4・3 上官への〈反抗心〉と戦友との〈連帯感〉

戦況の悪化で兵員不足は深刻となり、外地でも臨時召集が相次ぐようになる。昭和19年2月、C氏にも召集令状が届く。「非常にショックだったね、がっかりしたね、少なくとも、ああ、これで、生きていう、少なくとも最低限生きていう望みは、少なくとも望みは消えないけども、そういう危険が迫ったって感じしたね」。しかし、応召先の山西省では、閻錫山率いる山西軍と日本軍との間に停戦協定が結ばれ(池谷 2007: 30-6)、共産党軍との戦闘が散発的に起きる治安戦の段階にあった。激戦の緊迫感はなくC氏は戦死の可能性を感じなくなつてゆく。

そして、初年兵教育中<sup>15)</sup>のある日、教育班で仲の良かった戦友E氏が上官の叱責を苦にして自殺する事件が起きた。E氏の自殺は、C氏にとって大きなショックであった。E氏は自殺する直前、小夜食に上がったぜんざいをC氏に譲る。「『ん? 何でお前食べないんだ』って言ったのね。そうでしょ、他人の分まで食べたいように皆思ってたのに、『いや、俺、今日は食べないんだ』って言うんだね、Eがね。『そうか、わるいな、じゃ俺、食べるよ』って言って俺は喜んで食べた、それほど深く考えないで」。その後、不寝番に回ったE氏は豚小屋の前で小銃を使い自殺した。

葬儀ではC氏が初年兵を代表して焼香をした。「そんなときに、下士官いるでしょ、班長。そいつを、俺、意識的に、お前、——(しばらく絶句)——お前が殺したんだと、意識的に、そう思ってね、俺としては睨みつけたつもりでね」。威圧的な上官は一人ではない。「気の弱いのは死んじゃうんすよ。私みたいに、こんなやつらに負けてたまるかっていうね」。C氏はこの事件を契機に「あらためて、この上官か、やつらに強い憤りの気持を持ちましたね」と、上官への〈反抗心〉を抱く。C氏にとって親しみを持つ中国人は‘敵’とは思えなかった。むしろ、‘敵’は日本軍の威圧的な上官だと意味づけられた。

E氏の自殺事件を契機に、マルクス主義によって

反軍的になっていた傾向はますます強まってゆく。しかし、反軍的な思想は、命令に背き軍務を怠るような行為とは結びつかず、むしろ軍務に精勤する結果を生み出した。抗命やサボタージュは激しい制裁を招くだけである。憤りの対象である上官との接触を最小限とするには、文句を言われぬよう軍務に精勤することが、一兵卒にとって軍隊で居心地の良い社会的地位を得る唯一の手段であった。こうして、C氏は上官に抱く〈反抗心〉から軍務に精勤していった。こうした〈生き方〉は、表面的には上官から模範兵として評価され、C氏は一等兵のときに兵精勤章を付与され、一選抜で上等兵となった。

ただし、C氏が軍務に精勤したのは上官への〈反抗心〉からだけではない。戦友との〈連帯感〉も軍務に精勤する結果を生み出した。例えば、筆舌に尽くし難い中国大陸での強行軍では、C氏ら兵隊同士は弱った者の装備を肩代りして助け合った。また、治安戦では中隊本部から離れた分遣隊での警備があり、兵隊同士の分遣隊勤務は敵襲も少ない農村生活で「わりと楽しかった」日々でもあった。部隊の戦友には郷里を同じくする者が多く、補充兵という境遇も共通しており、C氏は兵隊仲間と打ち解けて軍隊生活を日常化していった。同期の兵隊からは、一選抜の上等兵として何かと頼りにされたという。上官に対する〈反抗心〉が募り反軍思想が高まっていたのとは裏腹に、優秀な兵隊としてのC氏の評価が中隊で高まっていた。

#### 4・4 精勤の果ての逃亡

昭和20(1945)年5月、C氏は河南省南西部に新設された独立警備隊に転属となり、司令官O少将の当番兵を命じられる。「たまたま、まじめな、気が利く、しっかりしてるC上等兵がよかるうってことになったんだらうね」。

E氏の自殺事件以降、C氏は上官たちの醜行を目撃しては〈反抗心〉を強めてきた。討伐作戦前の査閲に酩酊状態で現れた大隊長、急襲先の部落の民家が燃える様に快哉を叫ぶ中隊長、中隊の公金流用が

発覚して自殺を図り死にきれず苦しむ曹長に非情な言葉を投げかける准尉など、幹部将校に対するC氏の反感は強いものがあつた。それが、そうした「支配層」の象徴である司令官の長靴をひざまずいて脱がし、風呂では背中を流し、酌婦の手配をするような‘軍務’に従事するはめになってしまった。当時、将官級の司令官の当番兵になることは名誉とされ役得もあつた。しかし、苦楽を共にした兵隊仲間から離れ、心の通わない副官らとの官舎暮らしは孤独であつた。結局、C氏は司令官に対する〈反抗心〉を抑えられなくなり、マルクス主義への傾倒から憧れていた共産党軍に向かって逃亡することになる。

逃亡を決断した背景には、C氏が日中戦争を侵略戦争と強く認識するに至つたことも関係している。C氏は山西省で共産党軍の支配地域を強襲する討伐作戦に何度か加わつた。民家の土塀に書かれた「打倒日本強盗」というスローガンなどを見ては、「日本軍はほんとに強盗する場所を求めていく武装集団だな」と、戦争の大義をまったく感じなくなってゆく。こうした戦争に対する批判的認識と、軍隊の「支配層」への強い反感と不信の念とが、C氏を逃亡へと突き動かしたのである。

以上、C氏は司令官付の当番兵となるまでは、優秀な兵隊として軍務に精勤してきた。上官に対する〈反抗心〉は自らの任務への没頭に向かわせ、苦楽を共にした兵隊仲間との〈連帯感〉からも軍務に精勤した。しかし、〈反抗心〉の対象である上官、それも兵団トップの女性絡みの私生活の世話に、C氏は精勤する意味づけをもはや持ちえなかつた。C氏は模範的な精兵から反逆的な逃亡兵へと一気に転換した。C氏は逃亡に至る経過について「私自身も、支離滅裂みたいな感じするんだけど」という。たしかに、逃亡は人生の転機に立つ大胆な行為であつたが計画性に乏しく衝動的であつた。しかし、兵隊仲間との〈連帯感〉が薄れて打ち込める軍務もなくなれば、現行の組織で精勤することの意味は失われて〈反抗心〉が噴き出す。

ただし、C氏は戦時下の社会において何かに精勤することを放棄したわけではない。C氏は共産党軍という別の組織、中国の地方社会に精勤の新たな対象を見出そうとしたものと思われる。結局、C氏の〈生き方〉は〈反抗心〉を梃子にして精勤の対象を見出すことでもあつた。こうした〈生き方〉が、戦後のC氏の人生においてどれだけ継承されているかは定かではないが、C氏の共産党や労働組合での活動、多様な職業遍歴から見て、絶えず「支配層」への〈反抗心〉を持ちながら、精勤すべき新たな対象を求める‘旅’を長く続けてきたものと解釈できる。

## 5 考察

ここまでA氏、B氏、C氏のそれぞれユニークな戦争体験のライフストーリーを見てきたわけだが、本節では彼らの戦争体験の体系化を試みる。

作田によれば、戦争体験を組織化・体系化するには「異なった実感信仰を相互に重ね合わせることによって、戦争史、ひいては世界史の中に自己と他者を位置づける方向」と、「体験者各自が現象的な快・苦の思い出を下に越えて、各自に固有の体験の深みをどこまでも追及してゆく方法」があり、後者は「ある線を越えて下降すると、「戦争」体験ではなく、人間一般の普遍的な体験が浮かび上がってくるはずである」（作田 1964: 6）という。そして「異質的な戦争体験がまず横に接合されてゆかなければならない。またそれと並行して各自が体験を縦に深めてゆく方向もある。体験した状況とその最初の意味は、個人ごとにいちじるしく相違している。だがそのいとぐちの違いにもかかわらず、意味の追及を続けてゆけば、多様な体験の底にある共通の核に達するであろう」<sup>16)</sup>（同 8）という。本節では戦争体験を「横に接合」する意味を大きくとり、本研究で取り上げた三人の元学徒兵以外の戦争体験の「核」とも言えるような回想や、先行する研究なども参考にして考察を進める。

本研究で分析した三人の元学徒兵の戦争体験に共

通する「核」は軍隊生活での〈精勤ぶり〉である。A氏は軍務に〈生まじめ〉に精勤し、B氏は軍務に〈生きがい〉を見出して精勤して自らが望ましいと考える軍隊での社会的地位を確保した。C氏は上官への〈反抗心〉を秘めながらも、仲間や上官から優秀な兵隊と認められるほどに精勤した。彼らの軍隊生活における〈生き方〉からは、学徒兵が軍務に精勤した「謎」を解く、いくつかのキーポイントを挙げられる。

第1は、私的制裁が罷り通るなど軍隊生活における過酷で不条理な環境である。こうした環境に生き残る一つの方法は、「よりましたな居場所」を軍隊に見出すことである。そのためのもっとも手近な方法は、軍務に勤しみ、上官から認められることであった。本研究の語り手たちのように、軍務に精勤したことは、結果として上官から評価され、彼らを軍隊でも比較的居心地の良い社会的地位へと押し上げ、さらにそれが励みとなって彼らを軍務に精勤させた。

なお、元学徒兵たちの軍隊への思いを自伝などからあつげられた山口宗之が「現役兵として入隊し酸鼻きわまる初年兵時代を体験した人びとにあってはそのみじめな境遇から抜け出し、しばしでも人間らしい境遇に身を置きたいという切実かつ素朴な願望の故に幹候・特操を志願したのであった」(山口2000: 124-5)と述べているように、軍隊で「よりましたな居場所」を得るために「地上部隊の一兵卒よりはるかに多くの死の危険が待ちかまえていた」(同110)航空兵科の特別操縦見習士官(特操)を志願する者もいた事実は、いかに初年兵教育時の私的制裁というものが耐え難い苦痛であったかを物語って余りある。

第2に、彼らの精勤を支えたものは上官として命を預かる部下への〈責任感〉や兵隊仲間との〈連帯感〉あるいは自分を支えてくれる家族の期待に応えようとする意思である。自分の無責任な行為や勝手な振る舞いは、こうした重要な他者を傷つけることになるという思いが彼らを軍務に精勤させた。彼らは戦争の大義に基づく使命感を日常的に特別に意識

していたわけではない。身近な他者への〈責任感〉や〈連帯感〉あるいは重要な他者への配慮が彼らの精勤を支えた一つの要因であった。

とくにここでは、将校としての〈責任感〉について詳述しておく。学徒兵論のなかには学徒兵が初級将校となったことについて批判的に捉える見方があるからである。例えば、『きけわだつみのこえ』の解説で小田切秀雄は「本書にはほんのわずかに露頭しているばかりだが、将校を着て肩で風を切り、そのような態度をもって兵隊に対する側面もあったのである」(日本戦没学生手記編集委員会 1949: 322-3 一部新字体に改めた)と述べ、新版『きけわだつみのこえ』では「もちろん本書にも、たとえば将校という軍隊内のきわめて特権的な地位にいることにたいする、きびしい自己反省のこぼをのべた学生がほとんどいない」(日本戦没学生記念会 1959: 231-2)と述べている。そして、安川は「この指摘はあたっているだけに、逆に事実上強制であった幹部候補生=予備学生制度志願を自発的に拒んだ少数の意図的「落ち幹」学生兵の存在は貴重である」と述べ、戦争遂行に対する「消極的ではあっても、一つの明確な自覚的抵抗の行動であったと評価できよう」(安川 1986: 251)という。

しかし、小田切の指摘は将校の「特権的な地位」に伴う将校としての〈責任感〉を学徒兵たちが強く認識していたことを見落としている。「将校を着て肩で風を切」るところか、多くの学徒出身将校は、自分よりも年齢が上で歴戦の部下の命を預かり統率するという困難に直面していた。そして例えば、中国戦線に陸軍将校として従軍した中野が「私が秘かに自分に与え得た任務は、私の指揮下に入った兵隊さんたちを死なさず怪我させず日本へ連れて帰るように務めることだったのです。これで私は意味のある私の任務を、心ひそかにですが、たしかに掴み得たのです」(中野 1992: 138)と端的に述べているように、将校という「特権的な地位」に就いたからこそ独自のヒューマニズムを軍隊で発揮した学徒出身将校たちの〈生き方〉を忘れるべきではないし、過

小評価すべきでもない。学徒出身将校は前線の‘消耗品’の指揮官として小隊を率いた者が多く、作戦の立案に深く関わったわけではない。中国戦線では行軍中に乗馬しようものなら真先に狙撃される危険の高い地位でもあった。山口も元学徒兵たちが「将校たらんとして錬磨に耐えてきたことを満足に思い、最善を尽くしたとして誇りにする心情を披瀝している事実を逸してはならないと思う」（山口 2000: 125）と述べているように、むしろ問題とすべきは、彼らの誇る〈生き方〉が無自覚に戦争遂行に回収されてしまった事実を、一つ一つ丁寧に意味づける作業ではないだろうか。

なお、一兵卒であろうが軍隊にいた以上は何かしらの軍務を通して戦争遂行を支えていたわけであり、軍隊内の階級の違いをもってしてその度合いが薄れるとは一概に言えない。将校としての〈責任感〉を持たないで済んだC氏も兵隊仲間との〈連帯感〉のなかに溶け込んで軍務に精勤していたわけである。その意味では将校になろうが兵隊にとどまろうが、軍隊に所属する限りそれぞれの社会的地位において戦争遂行の力とされていたことは同じである。

第3に、過酷な軍隊生活においても「楽しい」経験をすることである。本研究の語り手たちの「楽しい」ライフストーリーは軍隊生活の例外的なエピソードではない。丸山も軍隊生活を回想して「軍隊の内部でよかったことは一般化できないけれども、僕らの場合を考えてみると、休暇の時に一緒に戦友とどうこうしたとか、演習の休憩の時に歌をうたったとか、実に小さな些細なことが、あの沙漠のような生活の中で、オアシスのようによいものに感じるんです。それが堆積して大きな力になって独自に印象づけられております」（飯塚 2003: 150）と述べている。軍隊生活での「楽しい」こと、丸山のいう「実にトリヴィアルなもの」としてのよかったことが軍務の厳しさを一時的に緩和させ、学徒兵が再び軍務に精勤できる「大きな力」になったと解釈できる。

第4に、「自由」が制限される軍隊生活で、なげなしの「自由」を追求する態度も、学徒兵の軍務への

精勤を支えた。吉田が述べたように、「軍隊生活がある期間を経過すると、青年の順応力の大きさの故か、それぞれ自己流の工夫をこらして、自由の確保に努力する傾向があらわれはじめる」（吉田 1980: 55）。吉田にとって「自由」とはプライバシーの確保であり、海軍将校となった彼の「自由」の中心は「自主独立の読書計画による軍の規律への抵抗であった」（同）。

しかし、こうした内向的「自由」よりも、一兵卒にはない将校としての権能という外向的「自由」を求めて軍務に精勤したのがA氏とB氏であった。A氏は戦技改良に、B氏は軍隊生活の改良にそれぞれ「自由」を発揮した。両者とも軍学校で教わったこと以上の工夫を凝らしたのである。こうした創意工夫は青年の抑えきれない「自由」への渴望の現れであり、結果的に軍隊生活に活気を与え、戦争遂行の方向へと回収されてしまった。

他方、吉田の追求した内向的「自由」を極限まで突き詰めたのが一兵卒のC氏であった。上官からの「自由」を失ったC氏は、軍律の外側に思想と生活の「自由」を求めた。このプライベートな世界の存在こそ、C氏が〈反抗心〉を秘めながらも軍務に精勤できた影の力と言える。

第5に、軍隊生活の日常化（習慣化）である。小田実は「戦争が「英雄のいさおし」でなく、人間のいとなみである以上、そこに日常性が根強く存在したことは否めない事実だろう」（小田 1991: 49）と強調する。本研究の語り手たちは‘生きること’の基本である日々の生活の日常化（習慣化）のなかで、自然と軍務に精勤する行為を自明視していったものと考えられる。

A氏は戦時中を「まあまあ、日常に埋没してたっというか」と回想し、B氏も「ゆっくり国の行く末を考え、国を憂えるヒマがなく、仕事に追いかけていました」と回想する。C氏のようにグローバルな観点から戦争の性質を認識できた者も、逃亡するまでは軍隊生活に組み込まれていた。

星野芳郎は自身の体験も踏まえて「戦場にむかっ

た学徒の大半が、みずから自己の思考を切断することによって、自己の運命に黙々としたがったのである」(星野 2006: 16) という。しかし、軍隊生活では新たに「軍队的思考」を求められる。世間一般の常識が通じない軍隊生活では「軍队的思考」に慣れなければならず、そのための日常化(習慣化)の努力が精勤の自明視という結果を生み出した。「自己の思考を切断する」という主体的意思のない者でも、軍隊に存在することによって「軍队的思考」を取り入れ、そうした思考に基づく精勤という行為は習慣となって自然と意識もされなくなっていくのではないだろうか。

### おわりに

戦時でも平時でも、青年は自分なりの〈生き方〉を精一杯生きねばならず、そうした〈生き方〉は軍国主義などと共に綺麗に清算できるものではない。作田は戦争体験の共通の「核」というものについて次のように述べている。「共通の核だけが、異なった体験者のあいだにも伝達可能な項目である。そしてまた戦争の意味づけの遺産として後の世代に伝えられうる項目なのだ。これらの項目はすべて平和の時代にも体験されるからである。その意味で、戦争の時代と平和の時代とはけっして断絶してはいない」<sup>17)</sup>(作田 1964: 9)。ここで重要なのは戦争体験の「核」としてつながる個人の〈生き方〉の戦中と戦後における連続性である。つまり、戦争体験の「核」としての〈精勤ぶり〉に現れた彼らそれぞれの〈生き方〉は、軍国主義などのイデオロギーでは捉えられない戦争を支えた一人一人の「下からの力」であったと同時に、戦後の復興も支えた「下からの力」ではなかったか。

広田は主に現役の陸軍将校と、戦時期の庶民としての憲兵や教員などを分析して「立身出世アスピレーションは戦時体制の担い手層の「自発性」の少なくとも一つの源泉でありえたということである」と述べ「〈藤吉郎主義〉(引用者注: 地位アスピレーション)

ン)や〈第一種の金次郎主義〉(引用者注: 金銭的アスピレーション)がそのまま戦時体制を下から支えたという可能性」(広田 1997: 357-84)を示唆する。しかし、本研究で考察してきた元学徒兵たちの〈生き方〉は、立身出世主義といった意欲的なものに程遠く、また保身の術にも収まらない若々しさがある。それは「主義」として明確に取り上げられることもない多くの庶民がごく普通に〈若者らしさ〉として備えている社会的性格の現れではないか。

広田は「結局のところ、すべての国民が「臣民」または「皇民」として、イデオロギーを心理構造の中核的な価値として内面化したから、巨大な抑圧機構としての天皇制が作動していった、というわけではなかった。……言い換えれば、戦前期の天皇制は、内面化なしでも十分作動しうるシステムをなしていたわけである」(同 416)という。そして、天皇制システムを隔々で実質的に動かしていた源泉として立身出世主義を取り上げている。立身出世主義それ自体は戦後社会で否定の対象となり難い。

同様に、天皇制システムの下で遂行された戦争と軍隊生活というものを実質的に動かしていたものは、それ自体は戦後社会で否定の対象となり難い若者らしい〈精勤ぶり〉を発揮した〈生き方〉であった。だからこそ、軍国主義を否定する戦後社会が70年間も続いてなお、私たちは戦争遂行の可能性を完全に拭い去ったという実感を常に持てないのである。

本研究の語り手たちは自身の〈生き方〉を反省し戦争を否定する。しかし、〈生き方〉を反省はできても、否定はできない。その否定できない彼らの〈生き方〉について、筆者は共感を持って傾聴したし、私たちの〈生き方〉にも受け継がれている側面があるように思われる。では、彼らの生きた時代と似たような社会的条件が揃ったとき、彼らのように軍務に対して、生まじめに、生き生きと、あるいは反抗心を秘めていたとしても仲間との連帯感から戦争遂行の「下からの力」となって精勤してしまわないと、はたして私たちは言い切れるだろうか。

## 付記

本研究はシカゴ社会学研究会例会（2015年3月、12月）での報告に基づいて執筆したものである。

## 謝辞

本研究に御協力を頂きました三人の紳士に心より感謝致します。また、本研究の報告の場を頂きましたシカゴ社会学研究会に厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 「学徒兵」の定義は一様でないが、本研究では「概念的には大学高専出身で兵役に服した者を総称する見方」（藤森 1995: 333）を採用する。
- 2) 学徒兵としての戦争体験ではないが、例えば鶴見俊輔は戦時中も明確な反戦思想の持ち主であったにもかかわらず海軍軍属として通訳の任務に精勤した。こうした逆説的ともいえる〈生き方〉は「謎」と感じるものであり、ある対談で上野千鶴子は「ほかの人は英語がわからないわけですから、その気になればサボタージュもできたわけですよ」と質問し、鶴見は自身の反戦思想が周囲に悟られることの「たいへんな恐怖」から任務に精勤していた主旨の回答を語っている（鶴見ほか 2004: 48-9）。
- 3) 鶴見は「十五年戦争の始まるまで、日本の教育体系は二つに分かれて設計されていました。小学校教育と兵士の教育においては、日本国家の神話に軸をおく世界観が採用され、最高学府である大学とそれに並ぶ高等教育においてはヨーロッパを模範とする教育方針が採用されていました」（鶴見 2001: 55）と述べているが、皇国史観、軍国主義等が高等教育機関にはびこっていった戦時期においても、こうした西洋的教養を受け継いで日本社会の現状を相対的に認識できた者を、私たちは学徒（兵）としているように思われる。しかし、安川寿之輔のように「日本の近代教育が「二種類の国民」を形成してきたという把握は、教育史上の常識である」ことを問題視し、「大半の学生兵たちが、この時代にはこと戦争と戦争目的に対しては、労働者や農民と殆んど変わらない認識しかもてない青年として自己を形成させられ、あるいは形成していた事実こそ着目しなければならな

いのである」（安川 1986: 27-30）とする見方もある。

- 4) 学徒兵の思想について、岡田裕之（2009）は浪漫主義やラディカルな理想主義に偏らない独自の「わだつみ」思想として考察した。本研究で考察する元学徒兵の思想は、軍国主義、帝国主義、マルクス主義の影響を複雑に受けている。「わだつみ」らしくはない元学徒兵を研究の対象とすることは、従来の学徒兵論の前提とされてきた「わだつみ」思想を多面的に見直す契機ともなるだろう。
- 5) 「戦没兵士たちの手記集、およびそれに対する反応があぶりだすものが、戦争や戦争体験ではなく、たとえば日本の農民とは何か、日本のインテリとは何か、であることがわかる。……われわれが受けとろうとするものも、ある階層の戦争体験から見える、ある階層の特徴なのである」（高田 2008: 164-5）という高田里恵子の指摘は、従来の学徒兵論の傾向にも当てはまるのではないだろうか。
- 6) B氏とC氏は慶應義塾剣道部の後輩・先輩で交流がある。筆者は両者と共に旅行に行ったこともあるが、とくに戦争体験が話題にのぼることはなかった。作田啓一は「戦争体験を異なった世代へ伝えるのは困難だが、同世代のあいだではおたがいによく話が通じ合うとわれわれが思い込んでおれば、それは大きな錯覚である。われわれはたとえば〈気質〉の違いによって、相互に深く引き裂かれているのだ」（作田 1964: 3）と述べている。とくにB氏とC氏の間には将校と兵隊という従軍中の社会的地位に基づく戦争体験の大きな違いがあって、共通の話題が見つからないようである。
- 7) 例えば、「c世代は、高等教育機関に学びながらも、体制批判意識や軍隊批判意識を獲得する機会そのものを閉ざされ、b世代のように死ぬことに葛藤する比率も低下し、逆に殉国意識をもつ学生が増えている」とあるが、殉国意識の高揚と共に、死ぬことに葛藤する比率が低下するという分析は現実的なものと言えるのだろうか。安川自身、c世代に区分される程塚竹士の入営直前の日記（昭和20年4月、5月）について「日常的な感覚や本音ではどれ一つ実感できない建前ばかりの言葉で

- 日記を埋めつくすことで、程塚は死にたくないという本音を必死におさえこみ、「沖縄では……わが特攻隊は相次いで出撃……この感激の年に生まれたことを喜ぶと共に……いよいよ胸は高鳴るこの感情を持って入隊し、皇国護持のため敢然と戦う。」という決意を表明しているのである(安川 1986: 227)と分析しているように、殉国意識を持っても世代特性として死ぬことに葛藤する比率が低下するという主張には無理がある。主に戦没学徒兵など「決死の世代」の手記を分析した森岡が述べたように「前途に夢多いはずの若者達がどうしてやすやすと死を決しえようか」(森岡 1993: 75)。死生観をめぐって悩む様子が分かる程塚の日記の一節も参考までに引用しておく。「国家の興亡を考え天皇、国土、隣人、父母を考える時は、われわれの自己保存の本能にさからって特攻隊となり実践する。実践、短い言葉であるが匹夫の悩みはこの二字にある。われわれの前には大きな山がよこたわっている。暗い明かるいの感じはない。山のかげなる故に、山の頂上までには、何日かの日数が必要だ。そしてその時こそ実践であり、それは、結論である」(程塚 1959: 13)。なお、程塚は戦後に自身の日記を再読した感想の最後に「しかし、こんな灰色の中にも青春はあった」(同 14)と記している点にも注目しなくてはならない。「青春」と感じる何かが、本研究で強調する戦時社会を支えた‘下からの力’として回収されていたことを想像させるからである。
- 8) 「教育体験」の代代的な断層といっても、C氏が公的な教育の場でマルクス主義などを学べたわけではない。基本的にC氏も戦中派世代として、A氏・B氏と共通する軍国主義的な教育を受けていたわけである。広田照幸は「戦時期に青少年期に達した世代——いわゆる戦中世代——は、それ以前の世代に比べて、献身イデオロギーを忠実に内面化していたように思われる。……しかしそれは、教え込みの技術が適切だったからではなく、献身イデオロギーと対立する別の準拠価値を内面化する機会がほとんどなかったからではないだろうか」(広田 1997: 409)と指摘している。C氏の場合、社会人時代に「別の準拠価値を内面化する機会」を持ったことで、ある程度は内面化していた
- 「献身イデオロギー」がA氏・B氏にはない複雑さを持って〈生き方〉を規定することになってゆく。
- 9) 軍事教練の検定に合格した者は、入営後の試験に合格すると幹部候補生となり、短期間で陸軍予備士官になれた。候補生は採用後、甲種(士官たるべき者)と乙種(下士官たるべき者)とに区分される(大濱・小沢編 1995: 105)。
- 10) A氏は仙台予備士官学校において鉄拳制裁がなかったことを「指一本触れられませんでした」と強調する。これはA氏が所属した区隊の区隊長が温厚な人物であったための例外的ケースかもしれない。なぜならば、仙台予備士官学校でも鉄拳制裁を受けたと証言する元学徒兵の手記を散見するからだ。例えば、松田毅一は在校中に軍部批判などを秘かに書いた手記に次のように書いている。「制裁厳しく、全員、何回なぐりつけられたかわかりません。小生は部隊に於いて四、五回、本校に於いて十数回、而もこゝでは実にひどいなぐり方です。……然し兵隊の時のやうに、上等兵から靴の裏の馬糞を嘗めさせられたり、編上靴を首につつて各班を廻り、兵長から額に印をもらってくるやうな罰を課せられることはありません」(松田 1975: 102)。このように、予備士官学校においても制裁がなかったわけではない。
- 11) B氏の戦争体験についてはすでに筆者がモノグラフとして取り上げている(渡辺 2015)。本研究では一部重複する箇所もあるが新たなデータも加えて他の学徒兵の戦争体験と比較するために再構成した。
- 12) 高専校以上の卒業者は、試験に合格すると海軍予備学生となり、短期間で海軍予備士官になれた。
- 13) C氏の戦争体験についてもすでに筆者がモノグラフとして取り上げている(渡辺 2013)。本研究では一部重複する箇所もあるが新たなデータも加えて他の学徒兵の戦争体験と比較するために再構成した。逃亡に至る詳しい経緯についてはモノグラフを参照。
- 14) 中国人強制連行に関わった組織であるが(西成田 2002)、C氏は強制連行に関わったという認識を持つような仕事はしなかったという。
- 15) C氏は入営直後に発疹チフスを患い、陸軍病院に長期入院してしまう。こうした経緯もあったた

めかC氏に幹部候補生試験を受験する機会はなかった。現役兵として入営が決まっていたころについては「いわゆる思想的な洗礼も受けてないもの。普通の人間だもの。それ（兵役）は避けて通れない、当時の日本の少なくとも若者としては、当然のルートに乗っかってるだけだからね。そしてもちろん、幹部候補生でも受けてなってくわけでしょ、普通ならば」と語っているように、C氏も場合によっては幹部候補生を志願して予備士官になっていたと思われる。

- 16) 戦争体験の共通の「核」として、作田は①「人間は自分で納得のできる秩序がなんらかの程度において実現されなければ、生活するという感覚を忘れてしまうこと」、②「だが日常の市民的・ブルジョアの秩序が抹殺された状況においても、生きものとしての人間間の連帯を形成する可能性はあること」、③「だがまた、人間の死が日常茶飯事とみえるような無関心の罪の支配する状況にも、人間は容易になじみうるということ」を例示している（作田 1964: 9）。なお、①は演習から内務班に帰ると整頓しておいた衣類が古兵によってめちゃくちゃにされており、たまたみ直す無意味な作業を繰り返すような体験が念頭にある。丸山真男も「軍隊の本当のつらさは、可測性がない、見透しがないということにあると思う。……要するにルールは上級者と不可分に結合しているということなのです」と軍隊生活の「不可測性」を指摘している（飯塚 2003: 164）。②は本研究の考察の第2のキーポイントに重なるものである。③については、本研究ではC氏が宣化の龍烟鉄鉞に勤めて劣悪な労務管理に適應していった過程に顕著に認められる。その意味では、「人間の死が日常茶飯事とみえるような無関心の罪の支配する状況」とは軍隊生活や前線での戦闘場面に限られたものではなく、戦時社会の日常生活にも見出される状況である。
- 17) 戦争体験の共通の「核」だけが他者や後世に伝達可能な項目であるとする作田の主張はやや極端である。戦争体験の「核」に達する以前の個別具体的な状況というコンテキストが見える戦争体験も記述によって伝達は可能であるし、戦争体験の「核」は常に個別具体的な状況と照らし合わせる

ことで戦争体験としてのリアリティを保つことができるのだ。戦争体験の一般化を拒み自身の戦争体験にこだわった安田武は次のように述べている。「戦争体験は、長い間、ぼくたちに判断、告白の停止を強いつづけたほどに異常で、圧倒的であったから、ぼくは、その体験整理の不当な一般化を、ひたすらにおそれてきたのだ。抽象化され、一般化されることを、どうしても肯んじない部分、その部分の重みに圧倒されつづけてきた」（安田 1963: 92）。作田と安田の主張それぞれを活かすには、本研究のように個別具体的な戦争体験を参照しつつ、その普遍的な人間の体験の意味を考察することが実践的論述の一つの方法と考える。

#### 参考文献

- Atkinson, R., 1998, *The Life Story Interview*, Sage.
- 防衛庁防衛研修所戦史室, 1976, 『戦史叢書 南西方面 陸軍作戦——マレー・蘭印の防衛』朝雲新聞社。
- Camic, Charles, 1986, “The Matter of Habit,” *American Journal of Sociology*, 91(5): 1039-87.
- 藤森耕介, 1995, 『ある学徒出陣の記録——海軍兵科 予備学生 改訂版』（自費出版）。
- 福岡良明, 2009, 『戦争体験』の戦後史』中央公論新社。
- 広田照幸, 1997, 『陸軍将校の教育社会史——立身出世と天皇制』世織書房。
- 塚塚竹士, 1959, 「戦争と教育——戦争, この超個人的な戦争, この劇的な」埼玉県教職員組合『さいたまの教育——戦争と教育の記録』, 12-4。
- 宝月誠, 2000, 「『物語的社会学』の原点——トマスとズナニエッキの『ポーランド農民』第三部を中心に」『社会学史研究』22: 39-48。
- 法政大学大原社会問題研究所, 1964, 『太平洋戦争下の労働者状態』東洋経済新報社。
- 星野芳郎, 2006, 『戦争と青春——「きけ わだつみのこえ」の悲劇とは何か』影書房。
- 飯塚浩二, 2003, 『日本の軍隊』岩波書店。
- 池谷薫, 2007, 『蟻の兵隊——日本兵2600人山西省残留の真相』新潮社。
- 井腰圭介, 1995, 「記述のレトリック——感動を伴う知識はいかにして生まれるか」中野卓・桜井厚編『ライフストーリーの社会学』弘文堂, 109-136。

- 岩井忠熊, 1991, 「十五年戦争期の死生観」馬原鉄男・掛谷宰平編『近代天皇制国家の社会統合』文理閣, 203-27。
- 松田毅一, 1975, 「予備士官学校からの機密通信」『歴史と人物』48: 98-106。
- 森岡清美, 1993, 『決死の世代と遺書 補訂版——太平洋戦争末期の若者の生と死』吉川弘文館。
- , 2013, 「戦争社会学と戦中派経験」福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編『戦争社会学の構想——制度・体験・メディア』勉誠出版, 3-22。
- 中野正太・宝月誠編, 2003, 『シカゴ学派の社会学』世界思想社。
- 中野卓(編), 1977, 『口述の生活史』御茶の水書房。
- , 1992, 『学徒出陣』前後——ある従軍学生のみた戦争』新曜社。
- , 1995, 「歴史的現実の再構成——個人史と社会史」中野卓・桜井厚編『ライフストーリーの社会学』弘文堂, 191-218。
- 日本戦没学生手記編集委員会, 1949, 『きけわだつみのこえ』東大協同組合出版部。
- 日本戦没学生記念会, 1959, 『きけわだつみのこえ』光文社。
- 西成田豊, 2002, 『中国人強制連行』東京大学出版会。
- 小田実, 1991, 『「難死」の思想』岩波書店。
- 大濱徹也・小沢郁郎編, 1995, 『改訂版 帝国陸海軍事典』同成社。
- 大貫恵美子, 2006, 『学徒兵の精神誌』岩波書店。
- 岡田裕之, 2009, 『日本戦没学生の思想——〈わだつみのこえ〉を聴く』法政大学出版局。
- 桜井厚・小林多寿子編, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房。
- 作田啓一, 1964, 「戦争体験の今日的意味」『思想の科学』29: 2-9。
- 佐藤忠男, 2007, 『草の根の軍国主義』平凡社。
- 白井厚監修, 1999, 『共同研究 太平洋戦争と慶應義塾』慶應義塾大学出版会。
- 高田里恵子, 2008, 『学歴・階級・軍隊』中央公論新社。
- 田中宏巳, 2010, 『復員・引揚げの研究』新人物往来社。
- 鶴見俊輔, 1968, 「戦争と日本人」『朝日ジャーナル』10(34): 4-10。
- , 2001, 『戦時期日本の精神史』岩波書店。
- ・上野千鶴子・小熊英二, 2004, 『戦争が遺したもの——鶴見俊輔に戦後世代が聞く』新曜社。
- 渡辺祐介, 2013, 「「戦争」から逃れることの困難性——ある逃亡兵のライフストーリー研究」『日本オーラル・ヒストリー研究』9: 138-152。
- , 2015, 「軍隊に適應した学徒兵のライフストーリー研究」『立命館産業社会論集』50(4): 93-114。
- 山口宗之, 2000, 『陸軍と海軍——陸海軍将校史の研究』清文堂出版。
- 安田武, 1963, 『戦争体験』未来社。
- , 1977, 『学徒出陣 新版』三省堂。
- 安川寿之輔, 1986, 『十五年戦争と教育』新日本出版社。
- , 1997, 『日本の近代化と戦争責任——わだつみ学徒兵と大学の戦争責任を問う』明石書店。
- 吉田文・広田照幸編, 2004, 『職業と選抜の歴史社会学——国鉄と社会諸階層』世織書房。
- 吉田満, 1980, 『戦中派の死生観』文藝春秋。

## A Study of the Life Stories of Student Soldiers Diligently Engaged in Military Service

WATANABE Yusuke<sup>i</sup>

**Abstract** : Student soldiers have a reputation, based on “Wadatsumi” stories, for being anti-war, and yet many have been diligent in the military service. The previous studies of student soldiers have explained their diligence, predominantly by their thoughts and the characteristics of their generation. However, one cannot fully understand their diligence, without taking a look at their “lifestyle” in the military service. Their “lifestyle” as it is cultivated in the military, is also important for understanding the post-war lives of student soldiers who survived. Therefore, this paper reveals, by looking at their life stories, the “lifestyle” of three former student soldiers who were diligent in their military service. In terms of solving the mystery as to why student soldiers were diligent in the military service, the results raise five key points. First, that recruits required recognition of their diligence from their superiors in order for their position, in the otherwise harsh military way of life, to be more bearable. Second, that feelings of “responsibility” and “solidarity” toward close comrades supported their diligence in the military service. Third, that enjoyable events in the military temporarily served to mitigate the rigors of military service, and provide a sort of sustenance to their diligence in the military service. Fourth, that a general attitude among recruits to pursue what little freedom they have in the army, where freedom is limited, supported their diligence in the military service. Fifth, that recruits come to view their diligence in the military service as normal, due to the every-day nature of their military life. In times of war and in times of peace, the young owe it to themselves to live their lives to the fullest and in their own “lifestyle,” and such a “lifestyle” cannot be dismissed along with ideologies such as militarism. But it is this precise “lifestyle,” which remains with recruits even after war, that provides a “bottom-up form of military strength,” one consisting of individuals who one-by-one support the war effort.

**Keywords** : student soldiers, war experiences, military life, diligence, life story

---

i Research Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University